

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI / 12ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないこと。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けること。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下とすること。

NITS・教職大学院・教 育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 熊本大学教職大学院 連携：熊本大学教育学部情報教育研究会 D-project 事業名： NITS・熊本大学教職大学院コラボ研修 熊本大学教職大学院情報教育研修会 年間テーマ<子供たちの可能性を引き出す「令和の日本型教育」の実現 ～教育観をアップデートする「教師の学び方改革」と「自律的な学び」の追究～> 開催日時：令和7年6月～令和8年2月 開催場所：熊本大学（熊本県熊本市中央区黒髪2丁目40番1号）にて対面およびオンライン配信 市民会館シアーズホーム夢ホール（熊本県熊本市中央区桜町1番3号）にて対面開催 参加者の属性：学校関係者・教育関係者・教職大学院関係者他（県外含） 参加人数：6月対面31人・7月オンライン492人・8月オンライン491人・9月オンライン387人・ 10月オンライン375人・11月オンライン302人・12月オンライン395人・1月対面36人・2月オンライン597人
--	--

目的：

本研究会の今年度の活動は、「教師の学び方改革」と「自律的な学び」の実現を中心テーマに据えた。教師が主体的に問いを持ち、他者と対話しながら省察を重ねる学びを通して、子供の自律的な学びを支える授業を再構築していくことを目指した。単なる知識の伝達ではなく、自らの教育観や実践の前提に気づき、深めることで、教育の質的転換を促す。また、GIGAスクール構想で整備されたICT環境の活用も本研修の重要な柱である。1人1台端末を活かした学びのデザインを検討し、子供の主体性を引き出す指導方法や校内研修の在り方についても共に探究してきた。教師の学びと子供の学びを往還的に捉え、両者を高め合う研修を構築することで、学校全体の学びの文化の更新を目指した。さらに、本研修を将来の研修プログラムに繋げることを目的とする。

内容：

6月7日(土)「iPadで学習を拡張する」～学習の目的により主体的に創造的で協働的な学習に取り組むことができるようにApple製アプリを中心に指導や学習に活用できるスキルを身につける対面型研修を行った。

7月5日(土)「『学びにくさ』を学ぶ～1人1人の子どもの『わかった!』を目指して～」～特別支援教育士である井上賞子氏を講師として招き、子どもたちの「学びにくさ」について学んだ。参加者の質問や意見を交流し互いに学びを深めた。

8月30日(土)「自由進度学習」～自由進度学習の実践者である難波駿氏を講師として招き、主体的に学ぶ子どもを育てるための教師の役割と具体的な授業像をつかむ。参加者とディスカッションを交え、子どもたちが主体的に学ぶ授業について掘り下げた。

9月13日(土)「自己調整学習～子どもたちが主体的に学習を調整するための方略を学ぶ～」～桃山学院教育大学の木村明憲氏を講師として招き、子どもが自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことや教師の役割について学んだ。

10月18日(土)「その自由進度学習、間違っていますか？」～中部大学の樋口万太郎氏を講師として招き、算数科における自由進度学習を中心に学んだ。「間違った自由進度学習」になってしまう理由や「失敗しない進め方」について、参加者の質問や意見を交流し互いに学びを深めた。

11月15日(土)「家庭学習～予習と授業の連動」～学習院大学の篠ヶ谷圭太氏を講師として招き、従来通りの家庭学習を脱却する効果的な家庭学習について考えることにより、家庭学習と授業の連動のさせ方について学んだ。

12月13日(土)「個別最適な学び～社会科における個別最適な学び 授業デザイン～」～関西学院初等部の宗實直樹氏を講師として招き、従来通りの家庭学習を脱却する効果的な家庭学習について考えることにより、家庭学習と授業の連動のさせ方について学んだ。

1月10日(土)「AIとのつきあい方～デジタル・シティズンシップで学ぶAI倫理～」～中央教育審議会の専門委員も務める今度珠美氏を講師として招き、AI倫理の基礎から、学校現場で押さえておきたい視点、授業での具体的な扱い方までを実例を交えて学んだ。

1月17日(土)「若手教師の挑戦! 前田康裕先生と語る授業アップデート」～小学校・中学校の若手実践家が、次期学習指導要領を見据え、挑戦した授業を報告。それを個別最適な学びと協働的な学び、学習方略など気になるテーマで、前田康裕氏が深掘りをしていき、授業観のアップデートを目指した。

2月21日(土)「学習方略って何だ? ～『まんがで知る学習方略』を深掘りする～」～『まんがで知る学習方略』の著者である前田康裕氏を迎え、「学習方略」をテーマに語り合い、授業実践者の声も交えながら、現場に引き寄せて理解を深めていった。

成果：延べ約 3,000 名の参加を得た。多くの回で 300 名～500 名近くの参加があり、全国的な関心の高さが伺えた。 アンケート結果から

- ・「わかりやすく繰り返し教えれば理解できる」という従来型の考え方を問い直す必要性を再認識しました。
- ・「分かりやすい授業＝よい授業」とは限らず、多様な学び方を尊重する発想が重要だと思いました。
- ・自由進度学習は目的ではなく、自己調整力を付けるための手段だと学びました。
- ・「自由進度＝教師が楽できる授業」ではなく、一斉授業以上の教材研究と観察眼が必要だと思いました。
- ・教師の介入や「教育的鑑識眼（判断力）」の重要性に気づきました。
- ・授業と家庭学習を連動させることで学習者の自己調整能力が向上すると学びました。
- ・「どのように（事実追究）」に留まらず、教師が意図的に「なぜ（意味追究）」を問いかける重要性を再認識しました。
- ・エコーチェンバー現象などのリスクを理解した上で、まずは教師や保護者自身が AI と向き合い、アップデートし続ける必要があると学びました。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

① 「**正解**」の伝達から「**問い**」の共有への転換 『論点整理』において「質の高い探究的な学び」や「子供のエンジェンシー（主体性）」の重要性が示されたが、これを実現するためには、まず教師自身が「正解のない問い」に向き合う経験が不可欠であると痛感した。従来の研修は「講師が正解を教える場」になりがちであったが、本研修（特に「自由進度学習」や「AI 倫理」の回）では、講師自身も「試行錯誤の途中」であることを開示し、参加者と共に最適解を探るスタンスを買った。その結果、アンケートには『「自由進度＝放任」という誤解が解け、教師の高度な環境設定が必要だと気付いた」といった声が多く寄せられた。これは、教師が受動的な「受講者」から、自らの実践を問い直す「探究者」へと変容した証左であり、NITS が提言する「研修観の転換」そのものであると考える。

② 「**個別最適な学び**」を支える教師の専門性の再定義 「自己調整学習」や「学習方略」を扱った回を通じて、参加者の関心が「How（やり方）」から「Why（子供の姿）」へと深まる様子が見て取れた。『論点整理』でも「学習方略の指導」が明記されたが、研修を通じて「静かに困っている子」や「できるだけ疲弊している子」への眼差しが共有されたことは大きな成果であった。ICT や AI はあくまで手段であり、それを使いこなすための「教師の教育的鑑識眼（見取り）」こそが、これからの学校教育における核心的な専門性であると、運営側としても再認識させられた。

アイデアや工夫したこと：

① **次期学習指導要領を見据えた研修テーマ** 『論点整理』で示された重要キーワード（「情報活用能力の抜本的向上」「自己調整」「デジタル・シティズンシップ」等）を先取りし、企画を構成した。例えば、夏に「自由進度学習」で子供の主体性を考え、冬に「AI 倫理」で最先端の課題に触れ、年度末に「学習方略」で学び方を総括するといったストーリー性を持たせたことで、延べ約 3000 名という多数の参加と、高いリピート率を実現できた。

② **教師の「個別最適な学び」を保障するハイブリッド環境** 多忙な教員が「自律的に」学べるよう、研修形態そのものに柔軟性を持たせた。

・**反転学習の導入**：多くの回で講師著書の事前通読を推奨し、当日は基礎知識の解説を最小限に留め、本質的な議論（対話）に時間を割いた。

・**ハイブリッド活用**：実技が必要な回は対面、理論共有はオンラインと使い分けた。これは『論点整理』にある「デジタル学習基盤を前提とした学び」を教員研修レベルで実践したものであり、場所や時間を超えた「協働的な学び」のモデルケースとなった。

③ **現場の「熱量」を可視化・共有する場の創出** 「若手教師の実践発表」では、参加者全員で実践の悩みや工夫を共有する雰囲気づくりに注力した。地域を超えて「学び続ける教員コミュニティ」を形成する一助となった。

